
drunk

高平 由孝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

d r u n k

【Nコード】

N 6 3 8 1 Z

【作者名】

高平 由孝

【あらすじ】

とある祭に投稿したモノです。

感想欲しいです、ヨロシクですm (- -) m

そのバーに居る客は、皆一様に酔っていた。但し、酒に酔っている訳では無い。

ある者は普通じゃ滅多に見る事が出来ない『名画』を見て。

またある者は、自分を賞賛し褒め称える『賛美』の声に。

そしてある者は、美しくなった自分の『顔』に――。

今から約百年前に禁酒法が成立して以来、今や「酒」はすっかり歴史上の遺物と化して、人々の記憶からも消えていった。本来、それを提供する場である「バー」もその流れで消えていく、筈だったのだが。最近生み出された『ある物』によって、「バー」は徐々に復活した。最も、提供する物は全く違った物になっていたが……。

ドアが開き、男が入って来た。

「あ、いらっしやい」

カウンターにいる、無精髭を生やした三白眼のバーテンは、にこやかな顔で来店者を迎える。

「やあ。一ヶ月振り、かな？」

入ってきた男は、年季の入った茶色のトレンチコートを入り口のハンガーに掛けて、店内を見回す。店内に居る客は三人で、その内二人は夫婦なのだろうか、テーブルで向かい合って、笑顔で何やら話し合いながら座っている。そしてもう一人の、脂ぎった中年の男はカウンターで手元にある何かを見つめて微笑んでいた。男はバーテンの向かいに座ると話しかけた。

「マスターは最近どうだい？ 前来た時は元気そうだったけど」

「ああ、えつと……」

不意に、カウンターを拭く手を止めて言葉を濁すバーテンの青年。その様子で、男もそれから何かを悟り「――そうか」と呟く。

「親父、言っていましたよ。『アイツが今度来たらツケ払わせろ』っ

て」

バーテンは一転して、明るい調子で男に告げる。

「ハハッ、やっぱり忘れてなかったか」

「……そして『ありがとう』とも、言っていました」

「……………」

数分の間、二人を沈黙が包む。

「あ、そうそう！ 俺、やっと「アレ」が出来る様になったんですよ！」

「へえ、良かったじゃないか」

「ちよつと用意するんで、待って下さい」

バーテンが準備してる間、男は横の男の様子を伺う。相変わらず男は手元から目を外さない。その手元には一枚の紙が握られていたが、それは全くの白紙だった。

「ねえ、この人はどんな注文をしたの？」

男はバーテンに問い掛ける。

「ああ、その人は『数百年前に無くなった幻の名画を見せて欲しい』と言われました。で、あそこのお二人は」

バーテンはテーブル席に居る二人を手で示す。

「男性の方は『全世界の人々に賞賛されたい』と、そして女性の方は『自分の顔を世界で一番美しくして欲しい』との注文を受けました」

言われて、二人の会話に耳を傾ける男。すると、女が「フフツ、そうでしょ？ こんな私と一緒になれて、貴方も嬉しいわよね？」と言うのに対し、男は「そうですよ！ 俺はダメな奴なんかじゃないんだ！」と、その実言葉は全く噛み合っていない事が分かった。

「さ、今日はどうしますか？」

準備が整ったバーテンは、そう男に問い掛けた。そのバーテンの前には、男には見分けがつかないが、およそ数百種類の小分けされた白い粉があった。

——「drunk」。そう名付けられた麻薬が生まれたのは数年

前。それは、調査次第でどんな「幻覚」でも自由に見せる事が出来ると言う物で、身体には勿論脳にも全く悪影響が無く、それを使っただ後の後遺症も無いという、正に夢のような物だった。だが、それが政府に見つかってしまい、「drunk」の製作者が指名手配された。が、今現在逮捕されたという情報は出ず、今も「drunk」は着々と、調査法と共に街に広がっている――。

「出来ましたよ」

男の前に、注文に合わせて調査された「drunk」が置かれた。

「……………」

再び男は、店内を見渡す。白紙の紙を見つめて微笑む男に全く噛み合わない会話をする男女。傍から見たらこの上なく異常な光景に見えるだろう。しかし、その本人達は確かに今酔い痴れているのだ。失われた『名画』に絶え間ない『賛美』、そして綺麗になった自分の『顔』に。

男は思う。自分が守った物は、「正しい」物だったのかと。頭を振ってその何時尽きるとも知れない自問自答を振り払うと、男は今宵も、甘い幻想に酔い痴れる為に、手を伸ばした――。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6381z/>

drunk

2011年12月21日14時52分発行